ソクラテス以前の哲學に於けるピュシスの意味

（岩崎氏に答ふ）

田中美知太郎

吾々が以下に於いて見ようとする言葉は論爭的な出發點をもつてゐる。それは、出助教授の近著「西洋哲學史第一卷」に於けるピュシスの說明に對して私が述べた疑問について、一人の愛敬ある人物が答へようとしたところから始まる。然しながら吾々の目的は論爭そのものではない。勝負ではない。私は自分が如何ほど殘酷に論破されようとも一つの眞實を學ぶことが出來るならば滿足する吾々は以下に於いてむしろ主としてこの眞實が明らかになるがための道を準備しようと思ふ。すなはち問題そのものを明らかにしよう。何となれば私の見るところにして誤なくば、私が當然問題を理解してゐると考へてゐた人々さへ問題を理解してはゐなかつた。人々は吾々の問題を形式論理上の問題としてしか理解してゐなかつた。然も豫め問題に對して準備されてゐないところでは、醫者を相手にして、なほ醫者よりももつと醫術を知つてゐると見せかけることの上手、ゴルギアスのやうな人が支配する。然もそれが如何に恐るべきものであるかは、今日の吾々の學問の現狀がこれを實證してゐる。

（注意）「ソクラテス以前の」といふ吾々の表題中の文句は精確

なものではない。吾々はむしろ「タレスよりデモクリトスに至るまでの」とでも言ひ直した方がよいかも知れぬ。然しこの點については別に誤解も起らぬであらうから、この字數の少い方をえらぶことゝした。

問題一

ソクラテス以前の哲學者たちはピュシスといふ言葉を使用したか。

彼等の言葉として吾々に傳へられてゐるものが信ずべきであるならば、彼等は使用した。Diels の Vorsokratiker index を見よ。

問題二

彼等は「そこから萬物が生じ、そこへ萬物がなくなつて行く」もの、すなはち彼等の考へでは水なり火なり氣なり土なりがかくの如きものであつたのであるが、かくの如きものをピュシスといふ言葉で呼んでゐたか。

否、彼等自身かくの如き言ひ方で言ひあらはしてはゐない。少くとも吾々に傳へられてゐる限りの彼等の言葉に於いては。たとへばアナキシマンドロスは「あるものにとつてなることがそこからであるところのもの、そのものへなくなることも亦必然によつて生じる」といふ言葉にもかゝはらず、このものをピュシスとは呼んでゐない。

然しながら、吾々はたとへばデモクリトスの徒について、シムプリキウスが「彼等はこれらのもの(アトマタ)をピュシスと呼んでゐた」(ディールスB一六八)と言つてゐるのを見る。のみならず吾々は「これらのことを言つてゐる者はいづれも火や水や土や氣をすべてのものゝ最初であると考へ、まさにこれらのものをピュシスとも名づけてゐるやうに見える」(ノモイ八九一C)といふプラトンの言葉をもつ。また「名づけた」「呼んだ」といふ意味にとつてよいかどうかは疑問であるが、アリストテレスの所謂「物理學」(ピュシケー・アクロ

アーシス）BI一九三a二一に於いても同じやうなことが言はれてゐるのに會ふ。從つて吾々は、直接彼等自身の言葉を通してゞはないけれども、これらの人々の言葉を通じて、あるひは彼等自身かれらの水土等をピュシスといふ言葉で呼んだのではないかと考へることが出來る。

彼等の書物が「ペリ・ピュセオース」といふ表題をもつてゐたといふことが若し事實ならば、こゝからも、「そこにピュシスと呼ばれてゐるのは彼等が萬物のはじめとして紹介しやうとする水火などのことであらう、何故ならこのものこそ彼等がそれを中心にして（ペリ）彼等の言葉を開展しようとする第一のものでなければならぬから」といふ風に考へて、彼等が水土などをピュシスと呼んだ證據を提出することが出來るかも知れない。然しながら彼等の書物の表題が皆かくの如きものであつたかどうかは疑問である。ロバンはこれらはアリストテレス以後の時代になつて附加されたものでてないかと言つてゐる*。まことにヘロドトスの文章は表題をもつてゐない。その代りに著者の名前と書かうとする事柄とを紹介する一の序文をもつてはじまつてゐる。

* L. Robin; La pensée grecque p. 48

問題三

それでは彼等自身が使用してゐるピュシスといふ言葉（問題一を見よ）は如何なる意味をもつてゐるか。

問題は彼等が使用してゐるピュシスといふ言葉が問題二に於いて考へられてゐるやうな意味に解釋され得るか、また解釋され得るとしてすべてのピュシスがかくの如き意味であるか、それとも他の意味でなければならぬものがあるか。また他の意味としてもそれは詩人たちや散文家たちもまた意味したやうな意味であるか、それとも第三の新

しい意味であるか、といふことになる。

ディールスのインデックスを見ると、ピュシスは二つに大別されてゐる。一つは Naturkraft, Naturanlage (Natura creatrix) 一つは Wesen (rerum natura) そして前者はピュシスの普通の意味、後者は問題二に於いて考へられたやうな特別の意味であらう。今もしこれら哲學者が火水等をピュシスと呼んだといふことをそのまゝの彼等の言葉に於いてゞはないとしても、彼等の言葉の中から何らかの風に解釋し出さうとする者があるならば、その者は恐らくこの第二の部門にあげられてゐるピュシスのどれかについてそのことを試むべきであらう。また彼等の言つたピュシスがすべて問題二に於けるが如き意味であることを主張しようとする者は、第一第二の兩部門にあげられてゐるすべてのピュシスについてこのことを證明すべきである。また反對にこれらの哲學者の言葉にあらはれてゐる限りのピュシスは皆一の意味である、問題この意味のピュシスといふ言葉は吾々に傳はつてゐる彼等自身の言葉の中には見當らぬといふことを言はうとする者はその逆を試むべきである。さらに――少しくどいが――これらの言葉の中には第一の意味があり得ることを考へるものは、恐らく第一の部門の中から適當な場合を發見するであらう。更にピュシスの新しい意味を彼等の言葉の中に見ようとする者はディールの與へてゐる材料の中にか、またはその外に於いて――たとへば新しき材料の發見、ディールスとちがつた讀方をとることなどによつて人はディールスの外に出ることが出來る――それを見、そしてそれを吾々に示すべきである。

（注意）ディールスのインデックスを見るとピロラオスその他のピタゴラス派の人たちの言葉が出てゐるけれども、E. Frank, Plato und die sogenannten Pythagoreer の研究が示すやうにそれは疑はしいものである。また吾々の問題二つとてソピステス

たちも考への外におかるべきであらう。

またディールスの分類は絶對的なものではない。たとへばヘラクレイトスの「ピュシスは匿れることを好む」といふ言葉をディールスは Wesen の意味の方に入れてゐるけれど、それは「素質」「木地」などの意味にして第一部類に入れることも出來る。

問題四

彼等が水火など、すなはちアナキシマンドロス的——アリストテレス的——表現を用ひるならば「そこから萬物が出てあり、そこへ萬物がなくなつて行く」ものを特にピュシスといふ語で呼んだとするならば、その場合のピュシスの意味は何であるか。

＊アナキシマンドロスについてはディールスの Vorsokratiker を見よ。また問題二を見よ。アリストテレスについては「タメタ、ピュシカ」A九八三B六以下を見よ。

ピュシスといふ語が單なる代語として無意味に使用されてゐるのでない限り、それは普通語の意味を失ふことは出來ない。同時にそれは火水などが萬物に對してもつてゐる「始めにして終りなるもの」といふ關係を言ひあらはしてゐなければならぬ。すなはちそれはピュシスといふ言葉としての何等かの意味に連絡をもち、然もピュシスといふ言葉がもつあらゆる意味に於いてゞなく、一定の意味に於いて言はなければならぬ。そして人も知る如くバーネットはこれを primary substance と解した＊——substance といふ語に多少の懸念を感じながら。ところで、これは彼等が水や火をピュシスと呼んだとすると、その場合彼等が考へたであらうピュシスの意味を相當によく言ひあらはしてゐる。アリストテレスも彼等について言ふ。「最初にものゝ principium-causa を知らうと求めた人たちの中大多數は素材の形に於ける始め (principia) のみをすべてのものゝ始めであると思つた。すなはちそこからすべてのあるものがあり、そして最初そこからなり最後そこへなくなるもの、その場合 substantia は限定(パトス)に於いて變化してもなほのこつ

てゐるもの、このものを彼等はあるものゝ元素であると主張してゐる。このものをあるものゝ始めであると主張してゐる。そしてこの故に、かくの如きピュシスが常に損はれずにあるといふ考へから何物も生ぜず何物も亡びずと彼等は思つてゐる。丁度ソクラテスが美しくなつたり、藝術のたしなみある者になつたりする場合、彼を絶對的な意味でたゞなる――(生ずる)――と言はないやうなものである。また彼がこれらの性質をもつことをやめる場合、彼を絶對的な意味で(美しくなくなるといふやうなくなるでなく)たゞなくなる(亡びる)と言はないやうなものである。なぜ吾々はさう言はないかといふと、それはその基にあるもののソクラテス自身があとにのこつてゐるからである。彼等が他の何物も生ぜず亡びずといふのもこの意味である。*** 何となれば彼等の考へでは常*** に一つまたは一つ以上のピュシスがあつて、このピュシスは損はれることなしに他のものがそこからなるのであるから。」(タ・メタタピュシカA九八三b六―十八)從つて吾々はアリストテレスが與へてゐる説明の範圍内では、Substance といふ語の懸念さへある意味に於いては**** もつことなしにピュシスを――アリストテレスの言葉ではアルケー(始めprincipium)を、それがかの哲學者たちの水火等を指すのである限りprimary substanceと解してよいのである。ロッスは右のアリストテレスの言葉にあらはれたピュシスをprimary substanceであるとし、ソクラテス以前の哲學者たちの「ペリ・ピュセオース」のピュシスがこの意味であることを注意してゐる*****。

* J. Burnet Early Greek philosophy (2ed.) p. 12―13 (3ed) p. 10―12, 363―364

** ὁ ἀεὶ ἄλλον のかけ方は、ἀεὶ ἄλλον について多少の懸念をもつのであるが、さし當りロッスの見解に從ふとする。

*** バイウオッターやロッスと共に ἀεί と讀む。ἐστί と讀まず

**** たとへば一種の基体としての意味などで

＊＊＊＊ ロッスの註釋一二九頁二九六頁

またピュシスのこの意味は當時に於けるピュシスいふ語の普通の意味と無連絡ではない。デイールスのインデックスに出てゐるNaturanlageといふ意味は同幹語φυσ-に對して特にピュシスが意味するところのものである＊。人の生れつき、素質。今これを諸物の生れつき、諸物の素質へもつて行くならば、吾々はかの哲學的ピュシスを得る。

＊ H. Schmidt, Griechische Synonymik IV. S. 63

問題五

ソクラテス以前の哲學者たちが彼等の哲學上の特別語としてピュシスといふ語を用ゐたとして、その意味は右の如く一定のものでなければならぬのであるが、然しこの特別語はこれ以外に解されぬであらうか。彼等はこの語を哲學上に於いても他の意味に使用してゐなかつたであうか。

決定的な答は不可能である。然し何等か他の意味であつたと主張するものは次のことを證明しなければならぬ。一、まづ彼等哲學者たちの言葉そのものから、そのまゝでか、あるひは解釋し出すことによつてか、彼等のピュシスがその意味であつたことを證明しなければならぬ。二には、ピュシスといふ語が彼等によつて哲學的に使用されてゐる場合すべてに於いて、その意味が今主張されてゐるやうな意味であつて、これ以外の意味になるのは非哲學的使用に屬するといふことを證明しなければならぬ。三には、プラトン・アリストテレス・ドクソグラプスたちによつて、彼等タレス以下の哲學者の考へたピュシスがかくの如きものであるとして言はれてゐることを證明する必要がある。特に一及び二の證明が充分でない時にはこのことが必要である。四には、ピュシスの意味が當時のピュシスといふ言葉がもつてゐた意味に結びつき得るものであるかどうか、特にそのピュシ

スの意味が後代に於いてもつに至つたやうな意味である時には、このソクラテス以前の時代に既にこの意味に使用されてゐたといふこと、その意味をつけることがアナクロニズムでないといふことを證明する必要がある。たとへばこのピュシスがゲネシスの意味であることを主張しようとする者がエムペドクレスの斷片八及び六三（言ふまでもなくデイールの番號）などのピュシスをゲネシスの意味に解し、ホメロスのオデュセイアナの三〇二―三などかゝる意味に解され得るピュニスをもつ個所をあげ、更にアリストテレスの「タ・メタタピュシカ」第五卷第四章のはじめに出てゐるゲネシスとしてのピュシスがこれらの哲學者たちの使用あるひは少くともアリストテレス前以の時代に於けるかゝる使用を前提とするといふやうに解釋することなどこれである。そしてこれに對して一エムペドクレスの言葉は必ずしもゲネシスの意味

であるを要せぬこと、またゲネシスの意味であるとしてもこれを哲學上の使用と解さねばならぬかどうかなほ問題であること、二、ゲネシスが哲學上の特別語としてのピュシスの意味であるならば、元子論者がアトマをピュシスと呼んだ場合（デイールスのデモクリトスB一六八）のピュシスも亦ゲネシスでなければならぬ。然るにアトマがゲネシスであることは不可能である。三、アリストテレスがエムペドクレスの斷片八をゲネシスとしてのピュシスのところに於いて引用してゐることはアリストテレスがこのピュシスをゲネシスと解してゐなかつた證據である。その他プラトン・アリストテレス・ドクソグクプスたちの證據が缺けてゐる。四、ホメロスのピュシスは必ずしもゲネシスであるを必要としない。またゲネシスであるとしても、以上一―三の理由によつて、もはや彼等哲學者たちのピュシスの意味がゲネシスであること

を少しも證明しない。またアリストテレスのゲネシスとしてのピュシスも必ずしも實際の使用を豫想したものとは解されぬ、單なる語源的説明とも解され得る。のみならずピュシスのピュはもはや φύομαι に於けるが如きゲネシス的意味をもたず、ラテン語の fu(ある)にむしろ對應する。といふ反駁が成立する*。

* W. A. Heidel, περὶ φύσεως (Proceedings of the American Academy of arts and sciences xv. 4.)
Lovejoy, "The Meaning of φύσις in the Greek physiologers" (Philosophical Review xviii 4) の、特に後者のバーネットに對する反對意見は、ゲネシス説であると思はれる雜誌が手許にないので詳しいことは解らぬが、バーネート及びロッスの反駁から大體を想像し得る。そして私は大體この反駁を是認する。

吾々はこの問題を決定的に答へることは出來ぬ然しながら、既に右のピュシスをゲネシスと解しようとする試みに於いても見られるやうに、この問題を肯定的に答へようとする者は、すなはちピュシスに何か新しい意味をつけ加へようとする者は多のく困難を、種々面到な手續を通して征服して行かなければならぬのである。然もそれが成功の望みは、これまでのところ、極めて不確實である。

タレスよりデモクリトスに至る哲學者たちの哲學上の特別語としてのピュシスはかくて——ピュシスといふ語がその後ソピステスたち、プラトン・アリストテレス・ストア・エピクーロス・懷疑派・新プラトン流などに於いて如何なる意味に使用され得たとしても、況んやラテン譯語 natura が中世哲學に於いて、そこから出た nature-Natur が近世現代に於いて、哲學的、非哲學的に如何樣の意味を持つとしても、、更にその日本語譯「自然」が如何に使用されてゐようとも（實際その使用は一面的である。從つて natnre-Natur を譯すのにも他の語譯「性」「性質」を使用しなければならぬ場合が屢々ある。然もこのことは哲學上の理解に特別な困

難を作り、種々の誤解を生む。他の多くの言葉も亦さうである）――すなはち後の時代の使用がどうであらうとも、否、同時代前代の使用と雖もその使用が哲學的でない限り、それらにかゝはりなく一定の――種々の證據から推される限りでは恐らくバーネットが與へてゐるやうな――意味に解せらるべきである。そしてその一定の意味にのみ解せらるべきである。

今こゝに一人の哲學史家があつて、ソクラテス以前の哲學を歴史的に叙述するに當り。特にギリシヤ語でピュシスといふ言葉を出したとするならば、吾々は當然それが右に規定されたやうな特別語ピュシスを言はうとしてゐるのであると考へなければならぬ。

ところでこの文章の始めにその名々あげた一人の哲學史家――それは私にとつて同時に尊敬すべき一人の先輩である――は吾々が今まで問題として來た時代の哲學を吾々に敎へようとするに當つて、ピュシスについて次の言葉を與へてゐる。

「――而してその（タレスよりレウキッポスまでの人たちの――田中）哲學の對象は世界（及び人生）の眞相如何にあり、この眞相は「プュシス」(physis＝ラテン語に譯して Natura 卽ち自然)なる語で現はされた。この「自然」といふは內外の區別が未だ明白にされないで內なる心的の事がそのまま外に自然界の一部として投射され、一樣に物の世界(卽ち自然)と見られたもの。かゝるプュシスを統一ある世界 (Kosmos) と見る。」一四頁

「さてかゝる宇宙論者（コスモローゲンの意ならむ。但、かゝる呼稱はプラトン・アリストテレス・ドクソグラプスたちのいづれに於いても現はれず――田中）たちはかゝる生成變化する世界（自然界）そのもの或はその本質或はその實相を physis (羅 natura 獨 Natur) なる語を以て呼んだと信じ

られる、それ故に彼等宇宙論者はアリストテレスによつて physiologoi (獨 Physiologen) と呼ばれた假りに邦譯して自然哲學者たち或は自然學者たちと呼ばう」四六頁

「哲學者たちは主として客觀的世界を對象とする自然哲學者 (physiologen＝Naturforscher) であつた」四八頁

「(タレスが——田中)どんな言葉でこの「もとのもの」(根源原理本質實體などゝ後に呼ばれるもの)を表はしたか詳らかでないが、多分この「有る」がまゝの世界「成る」がまゝの世界卽ち physis について、その「もとのもの」アリストテレスの語では「アルケー」を求めた。或は雜多なる一切に恒常的なるその本質 (physis) を求めたのであらう。だがこの場合 physis 或はその arkhe といふは時間的に「第一のもの」(太祖始源)でなく概念的・本質的・超時間的に「はじめのもの」「もとのもの」「第一のもの」を意味する」五二—三頁

吾々はこの言葉から何を學ぶか。實に澤山の驚くべきことを學ぶのである。そしてその一つとして吾々は所謂自然哲學者のピュシスが一方に於いてはこの世界そのものを意味し、他方に於いてはその眞相本質を意味するといふことを學ぶのである。そしてこの二つのものを彼等哲學者自身「ピュシスなる語を以て呼んだと信じられる」と聞かせられるのである。すなはち吾々はピュシスについての一の新しい——少くとも私自身にとつては極めて耳新しい——解釋に出會つたのである。吾々が知りたいと思ふ問題は何であるか。

一、ピュシス卽世界そのものといふことを彼等哲學者たちの言葉のどこから、直接にかまたは解釋によるかして、人は證明しようとするのであらうか。

二、またどこで世界とその眞相を併せてピュシスと呼んでゐるであらうか。二つの意味に解釋される言葉がどこにあるであらうか。

三、またプラトン・アリストテレス・ドクソグラプスたちがどこで彼等は世界そのものをピュシスと呼んだと說明してゐるであらうか。

四、またプラトン・アリストテレス・ドクソグラプスたちがどこで彼等はピュシスを二通りに卽ち世界とその眞相といふ意味に用ゐたと言つてゐるものと解かなければならぬやうな言葉を出してゐるか。

五、ピュシスが世界そのものを意味するといふやうなことをこの時代にもつて來るのはアナクロニズムではないかどうか。その時代に用ゐられたピュシスの如何なる意味にそれは結びつき得るか（アリストテレスは恐らく τὰ φύσει ὄντα または τὰ φυσικά の總稱ではないかと思はれる意味に於いてピュシスといふ言葉を若干使用してゐる、然し彼は「タ・メタタピュシカ」第五卷第四章に於いて恐らく彼の思ひ浮べ得る限りのピュシスの意味を擧げてゐるけれども、かくの如き意味を擧げてはゐない。このことは世界そのものとしてのピュシスが哲學語としてはおろか、普通語としてさへ本當には使用されてゐなかつたといふことを示すものでなければならぬ。所謂物理學「ピュシケ！・アクロアーシス」第二卷第一章に於いてもこの意味は擧げられてゐない。）

さて「西洋哲學史」の著者は一個の歷史家としては史料にもとづかぬ如何なる言葉も吐かないはずである。そしてこの方面の專門家として多くの文獻に通じてをられるに相違ない。ところで私は極めて見聞の狹い者である。アナキシマンドロス以下の斷片、プラトン、アリストテレスの著作などを讀みながら、色々な問題が解決出來ずに閉口し

てゐる者である。そして他の事を顧るの暇をあまりもたぬ者である。從つて私はこれは何か新しい眞理が發見されたか、または他の眞理が既に前からあるのに氣付かずにゐて、外の何人にとつても最早問題でないことを問題としてゐるのではないかと自ら疑ふのである。それとも私は私の讀んだ書物を誤讀してゐたのではないか。私はかくの如き懷疑的な氣持をもつて改造の文章を書いたのである。

あだかもこの時一人の親切な智者があらはれて私に敎へようとしたのである。それは「理想」といふ雜誌の五六月號「紹介と批評」欄に於ける岩崎勉氏である。氏は言ふ

「筆者は――physis（ピユシス）其他に關する、著者出氏の說明に對してなせる、田中氏の批評――事實批評とは云へないが――に就て、その甚だ不當にして無責任なる所以を示したいと思ふ。

「少しく普通の哲學史の知識以上に、ギリシャ哲學（或はその一部でも）に通ずる者ならば誰れとて右の田中氏の樣な疑問を起すことはないであらう。

Natur, nature と云ふ語は今日に於いても、自然天性、性質、本質、本性、素質など樣々なる意味に使用せられるが、ギリシャ哲學を通觀する時、physis（自然）なる言葉に與へられて居る意味內容は一層多種多樣である。そのことは、アリストテレスの所謂 physiologoi（自然哲學者等）たる、タレスよりプラトン以前の或る人々に至る多數哲學者が、主としてこの physis――世界そのものゝ意味でもあれば、また世界の本質をなすものゝ意味でもある――を以つて研究の對象とし、彼等の著書の題名も多くは peri physeōs「自然に就て」であつたことから考へても當然のことである。卽ち或

る人々は出氏の所謂「物の世界」「生成變化する世界」「自然界」或はなほ「あるがまゝの世界」「成るがまゝの世界」などを以つてそのまゝ直ちにピュシスと考へて居たであらうし、また或る人々は寧ろそれ等の「本質」「實相」「眞相」などを以つて、ピュシスなりと考へて居たであらう。同じ一つのplysis が多くの人々に依て斯く多種多樣に解されることは、もとよりなんの不思義もあるわけはない。若し併乍らそれ等のことに就て史料文獻が必要とならば、アリストテレスの physica「物理學」或は「形而上學」第一卷に於ける史的叙述をでも見ればよい。更にそれ以上に根源的な史料が必要とならでディールスなどに依て集錄されて居る彼等哲學者等の斷片そのものを見ればよい。それらの中に散見するピュシスなる語が、如何なる意味に於いて使用されてゐるか、田中氏にも合點が行くであらう。

「要するに田中美知太郎氏の批評は、批評者自身の無知と無理解とを示す以外のものではない。」

この言葉から他の人々が如何なる印象を受けたか、それは私の知るところではない。然し兎に角私自身としては、ほとんど私自身を忘れるところであつた。それほどこの愛すべき言葉は說得的である。然しそれにも拘らず吾々はこの言葉の中から吾々の知り度く思ふ問題について何一つ學ぶことが出來ないのである。一、問題はソクラテス以前の哲學についてゞあるのに、この博識家はわざ〳〵「ギリシャ哲學を通觀し」「ピュシス(自然)」の意味は「一層多種複雜である」と斷言してゐる。驚くべき斷言である。二、ではどうしてゞあると問ふ時、このすぐれた說得家は答へるのである。「そのことはアリストテレスの所謂 physiologoi (自然哲學者等)たる、ターレス(この智者の名譽のため

に一言すれば、これはタレースの誤植であらう！）よりプラトン以前の或る人々に至る多數哲學者が、主としてこのphysis――世界そのものゝ意味でもあれば、また世界の本質をなすものゝ意味である――を以つて研究の對象とし、彼等の著書の題名も多くはperi physeōs「自然について」であつたことから考へても當然のことである」すなはちこの「普通の哲學史の知識以上に、ギリシャ哲學に通じてゐる」に相違ない人物によれば、タレス以下の人々の研究の對象はピュシスであり、その著書の表題が「ペリ、ピュセオース」であるからピュシスの意味は「世界そのものゝ意味でもあれば、また世界の本質をなすものゝ意味でもある」のは「當然」であるとのことである。今こゝに一人の文學史家があつて、フロベエル、ゾラ、モオパッサンたちの傾向を自然主義の名で呼んだとしよう。そしてその自然主義とは山水の風物を描寫するを主とした文學上の傾向であると說明したとしよう。吾々がもし多少文學について知つてゐる者であるとしたら、無論吾々はかくの如き說明に驚いて、不滿足を表明するに相違ない。この時もし突然別の人物が足下からあらはれて、何某文學史にもこれらの人々は自然主義者と呼ばれてゐる、のみならずゾラ自身自然主義といふ字を使用してゐる、從つて彼等の自然主義が自然界の風景を描寫するを主眼したといふのは當然であると吠えたてたsit veria venboとしたならば、吾々はこの親切な人に何と挨拶したものであらうか。三、のみならず問題は、タレスよりレウキッポスたちに至る何人が、世界そのものをピュシスと呼んだか、といふことであるのに、「或る人々は「物の世界」「生成變化する世界」「自然界」或はなほ「あるがまゝの世界」「成るがまゝの世界」などを以つてそのまゝ直ちにピュシスと考へてゐたであらうし、また或る人々は寧ろそれ等の

「本質」「實相」「眞相」などを以つて、ピュシスなりと考へてゐたであらう。同じ一つのピュシスが多くの人々に依て斯く多樣多種に解されることにはもとよりなんの不思義もあるわけはない。」といふ答辯が與へられてゐる。吾々は再び問はなくてはならぬ。その「或る人々」とは一體誰のことであるか。なるほど一つの語があり、澤山の人があるとすれば、その語は多くの人によつて多くの意味に解かれ得るかもしれぬ、從つて「或る人々は――また或る人は」といふことが可能でもある。然しそれは單に空想された「可能なる場合」に過ぎない何人もそこから歷史上の事實を斷定することは出來ない。のみならず、その可能らしく見える場合さへ、その一方はほとんど不可能である。なんとなればソクラテス以前に於いて一般にピュシスといふ語が世界を意味したといふやうなことは、この驚くべき學者たちが新にそれを證明するのでないならば、事實でないであらうから。然も如何なる人間が自分たちに知られてゐない意味に於いて言葉を使用し得るか？　四、最後に吾々は「タレス以下の人自身の言葉に於いてか、プラトン、アリストテレス、ドクソグラプスたちの言葉に於いてか、いづれかに於いて吾々はタレス以下の人々のピュシスが自然界であつたといふことを確め得るかどうか」といふ問題に對してこの確信にみちた人が如何に答へるかを見よう。「若し併乍らそれ等のことに就て史料文獻が必要とならば、アリストテレスの「物理學」或は「形而上學」第一卷に於ける史的叙述をでも見ればよい。更にそれ以上に根源的な史料が必要とならばディールスなどによつて集錄されて居る彼等哲學者等の斷片そのものを見ればよい。それらの中に散見するピュシスなる語が如何なる意味に於いて使用されてゐるか、田中氏にも合點が行くであらう。」

幸にして無學な田中氏と雖もこれらの書物を讀んでゐるのである。そしてそのピュシスが如何なる意味に使用されてゐるか、少しは合點もしてゐるのである。然しながら「ペリピュ・セオース」といふ表題を見たゞけで驚くべき斷定を下し得る人のやうにではないのである。吾々はアリストテレス「メタフュジカ」の名譽ある翻譯者岩崎氏に質問しよう。アリストテレスは一體どこでタレス以下の人々のピュシスが世界を意味した、のみならず世界とその本質を意味ししたなどと言つてゐるか。その翻譯に於いて驚嘆すべき理解の程度と語學の程度を示してゐる* この人が如何なる個所を擧げ得るか、それは眞に興味ある問題である。然しあるひはこの說得術の大家は依然としてこれまでのやうな答辯をして吾々を烟にまくかも知れない。「こゝにピュシスといふ文字が出てゐる。だからそれはタレス以下の人々の言つたピュシスが世界であり、その本質であることの證據である」などと。

*私は無責任と言はれないために一例を示さう。それはどこからでもよいのであるが、さきに吾々も一度見た「タ・メタ、ピュシカ」A九八三b六—一八の飜譯をとらう。「初期に於ける哲學者の多くは、物質的原理を以つて萬物の唯一の原理なりと考へた。卽ち總ての事物を構成し、總ての事物の其處から生れまた結局其處に歸り行く所のもの、換言すれば其實體は不變に存在してたゞ其性質のみ變化する所のもの、それを彼等は事物の元素或は原理なりとするのである。而して彼等は斯かる實體は常に不變に存在するものなるが故に、何ものも發生することなく、何ものも消滅することなしと考へる。例へばソクラテスは美しくなり或は敎養を獲ると共に存在するに至るのでもなく、また夫等の性質を失ふと同時に存在しなくなるのでもない。何故ならば、基體としてのソクラテスそのものは、夫等のことには關係なく存在して居るのだからである。斯くの如くして、また他の如何なるものも發生し消滅することはない。何故ならば、一つにしても多數にしても、兎に角ある本質が存在すべきであつてその固執的なる本質から總ての他のものが發生しなければならぬのだからである」

然しながら、一「初期に於ける哲學者の多くは物質的原理を以つて萬物の唯一の原理なりと考へた」とは何であるか。アリストテレスはこゝで何か精神的原理と物質的原理といふやうなものでも語らうといふのであるか。アリストテレスはこゝでか

の有名な四つの原因を立てゝ、これらの Causae principia がすべてを盡してゐるといふことを、前人たちの發見した principia も亦結局この四つのどれかに屬する、それ以外の新しい principia は發見されてゐないといふところから、言はゞ證明しようとしてゐるのである。そしていざ前人たちを見ようとして、忽ち「初期哲學者の多くは物質的 principia を以つて萬物唯一の principia と考へた」などゝ言ふのであるか。一體 ἐξ ἑνὸς εἴδους (ἀρχῶν) のどこを物質的などゝ譯したのであるか。二、一例へばソクラテスは云々」以下終りまで一體誰がさう考へたのであるか。譯者は如何なる原文を目の前においてゐるのであるか。斷りがない以上序文の言葉を信用してよいなら、それはロッスの原文でなければならぬ。ロッスの原文なら十七行目の infinitivus εἶναι のかゝりはどこへ行くのであるか。三、一般的に言へば、譯者はロッスの原文によつたといひながら、九行目の πάθους、十行目の τοῖς δὲ πάθεσι μεταβαλλούσης の文法的性質、十一行目の φασιν 及び διὰ τοῦτο 十二三行目の ἐν—ωνομασμένης の文法的性質、十四行目の ἀνάγκης 十七行目の ἀεί が目に入つてゐない。英譯や獨譯からあれこれと不注意な直譯をするより出來ない人が、ピュシスやロゴスの譯語を云々する！　何と勇しいことではないか。四、そのほか θεὸς ἀκίνητος（十三行目十八行目）を「かゝる實體は常に不變に存在するものなるが」と譯したり、「固執的なる本質」と譯したりしてゐるが、これは一體何の意味であるか。「固執的」とは何のことであるか。どこで「不變に存在する」

などゝ言はれてゐるか。アリストテレスはむしろ逆のことを言つてゐる「οὐσία はバストに於いて變化しているものこつてゐる」と言つてゐる。のこつてゐるといふのは變化しないといふことではない。ソクラテスは美しくなりまたなくなる。この變化を通じてソクラテスがのこつてゐると言はれるのは、ソクラテスがこれらの變化に伴つて絶對的に「なり」「なくなる」のでないからである。無論これも一種の不變化といへる。然しわざ〳〵この意味に於いて――他の個所との矛盾の危險を冒して――「變化しない」などゝ譯さなくとも、この言葉そのものゝ具體的な意味を理解するだけの力があれば別な譯語はいくらでも見付かるはずである。五、ὑπομένειν がどうして「關係なく存在してゐる」であるか。ソクラテスは美しくなるソクラテスに關係がないといふのか。六、また終りに「一にしても多數にしても」とは何であるか。「一より多い」といふことは決して「多數」といふことではない。等々々。

吾々はこの吾々に對して何かを教へてくれるかのやうに見えた人、然もそこから何一つ學ぶことが出來なかつた人、この尊敬すべき人に對してもう左樣ならを言はう。無論人は未だ問題がのこつてゐると言ふかも知れぬ。田中氏は果して無責任

な批評家であつたか。無知にして無理解なる者であつたか。これに反して岩崎氏は、多くの他の翻譯者や論述家などと同じく、ゴルギアスの流れをくむすぐれた智者であるかどうか、この問題がかの「要するに田中美知太郎氏の批評は云々」と云ふ形式の結語を以つて解決されなければならぬといふかも知れぬ。然しながら私自身については無論私は私が實に物を知らない男であることを知つてゐる。然しながら岩崎氏については、彼が如何なる人であるとしても、それを知ることによつて私は別に何物も得ることはない。だから吾々は彼をその好むやうな人にしておこう。また問題の著書そのものについても、無論それが岩崎氏級の人の賞讃に値するものであるといふことを保證するにとゞめよう。

以上によつて吾々は問題が何であるかを一通り明らかにすることが出來たと信ずる。それは一の史的概念の問題である*。哲學史が一の史學であり、史學が一の嚴格な訓練の下に學ばれなければならぬ學問である以上、哲學史の問題として、吾々の問題も亦嚴密な取扱ひを受けなければならぬ無論吾々が以上に於いてなしたものはかくの如き問題の解決ではない。言はゞかくの如き問題そのものゝ防衛である。多くの人々が哲學史の研究といふことを單に半ば通俗的な哲學史教科書を二三冊讀んで、これを折衷することであると考へてゐるやうな時代に於いては、哲學史上の問題は屢々文章家演說家體系家などによつて蹂躙されようとする。微力ながら吾々がこゝになしたやうな防衛もなほ一つの必要事である。

* くどくともう一度言はう。それは例へばプラトンのイデアといふやうな問題である。それは後世のそれに當る譯語で如何樣に使用されてゐようとも、まだプラトン自身が當時の普通の意味に於いて幾度その語を使用してゐようとも、それはそれ

らとは別なものとして取扱はれなければならぬ。同じくアリストテレスのピュシスにしても、アリストテレスのその語の使用の多樣にもかゝはらず――尤、見かけほど多樣ではない――、哲學史上特にアリストテレスのピュシスとして考へなければならぬものはきまつてゐる。それは「それ自身の資格で自分自身の中に動の始めをもつてゐるもの、本質」あるひは「かくの如き始めとなるもの」といふやうなものである。

また言ふまでもなく、彼等タレス以下の人々の立場が獨斷論であるか、唯物論であるか、主客の區別を知らぬ無邪氣な立場であるか、彼等の見てゐた世界が要するに今日の自然界以上に出ないか、どうかといふ問題は、わざ〳〵ギリシヤ語ピュシスを用ゐて「彼等のピュシスは何であつたか」と問ふ場合の、そして以上に於いて吾々が問題として來たやうな、問題と混同さるべきではない。如何なる哲學史に於いても、前者だけの問題にわざ〳〵ピュシスといふギリシヤ語を用ゐてゐるのは見られない。吾々の意味でわざ〳〵ギリシヤ語を使つてゐるのは見られない。

新刊紹介

島地大等著　思想と信仰　一冊

明治書院發行
定價參圓五拾錢

故島地大等師は眞宗西本願寺派僧侶として近來稀に見る篤信なる學者であつた。多年東洋大學教授、東京帝國大學文學部講師等の要職にあつて、佛教學界に多大の貢獻をした人である。その研究は鵜呑み込みの西洋の學問を基礎として、所謂新しい研究を佛教上に試みたといふだけのものではない。十分に佛教の古典籍をかみしめ、しかも印度學にも、西洋の學問にも深い研鑽をとげて新研究を試みられたのであるから、正統派の老學者の眼から見ても危險でなく、新進の學者から見ても因襲に陷らず、中正の大道を裕々として進んで行くやうな研究であつた。しかしこれだけなら必ずしも師の偉大な事を稱するに足りないこの程度の篤學者は世間に少くないからである。

師は前記の如く稀に見る篤信な人格者であつた。それは大正五年より現西本願寺派管長大谷光昭猊下の輔育掛となり、一派内の重大なる使命を全うせられた事によつても、よく知る事が出來やう。されば師の研究は純客觀的に佛教を研究したものではなく、その論究の底には、常に釋尊の遺法を篤く信じ且つ篤く行ふ僧侶たる自覺が強く流れてゐる。といふ意味は信仰の爲に事實を曲解したり、堅日異同を強ひたりした迹があるといふのではない。釋尊の遺法がともすれば現代によく理解され難いのを憂ひ、飽くまでも廣長舌を振つて之を世に弘めんが爲に、出來るだけ之を正直に素直に解釋し闡明しやうと努力されたのである。

惜しい哉昭和二年七月病の爲に往生されたので遺弟の諸氏は相議つて重要な遺稿を全集六册に收めて出版されることゝなつ